助詞の表すモダリティ

-構文表現と話し手の意図-

仁科陽江（エアフルト大学）
yoko.nishina@uni-erfurt.de

１．はじめに

外国語でコミュニケーションを行っているとき、語彙も構文も意味はすべてわかるのに、母語話者のように理解できないことがある。辞書や文法書をひもといてみても、相当する項目や記述は無く、母語話者に尋ねてもどうも要領を得ない、ということもあろう。それはなぜなのか。文法記述の欠如部分なのだろうか。それとも、その場の状況に限られた、応用可能な記述のできない分野なのだろうか。実際の発話の際に、話者のどのような意思が言語化されているのか、あるいは、されていないのか、学習者にどのように説明すればよいのか。そのような疑問から出発して、小さな例をもとに、その記述の可能性を探りたい。助詞の表すモダリティというと、終助詞の使用についてこれまで研究が多くなされてきたが、ここでは、格助詞とそれに代わるものを指す。

２．言語例と問題提起

たとえば次のような状況を考えてみよう。スーパーで大根を買おうとしている主婦がつぶやくシーンである。

（1）「これはいい」と言って、買わなかった。

（2）「これがいい」と言って、買った。

（3）「これでいい」と言って、買った。躊躇したが、買った。

どうしてこれ「で」いいのか、という質問に、彼女が答える。「形は悪いけど、どうせ大根おろしにするんだからこれでいい。」

日本語学習者たちには、助詞が違うだけでこれだけ意味が違うということが理解しがたい。辞書をひいたり助詞についての文法書の記述を探したりしても適当な説明がない。そもそも、これは助詞のせいなのか。 語用論的に説明すべきことなのか。どれも文字通りの意味は It is good のようなものであるが、それにこめられた話者の意図がまったく違う。

このような問題提起をもとに、以下、次のような視点から分析を行う。

まず、助詞の意味と機能を検証する。意味論、統語論、および情報構造論的な角度で、それぞれの助詞が上記の例のように用いられる契機を探る。次に、述語を作る成分の多義性に注目し、形容詞の役割を確認する。さらに、述語が助詞と組み合わせられて得られる構文機能について言及する。また、省略という観点から、モダリティ表現における話者と他者の関係を明確にし、省略の含意するものを復元する妥当性を論じる。最後に、聞き手との関係によって副次的に異なる意味へ広がるプロセスを追い、文化的要素とも共通する原理を確認し、意味分化のメカニズムを明らかにする。これらの手続きを経て、一見して理解のしようがないと思われる話し手の意図を確定し、辞書や文法書でも調べに

くい言語事実を説明する一助にしたい。

３．助詞の意味と機能

3.1.　助詞ハ

助詞ハについては、その機能を次のように大きく分けることができるかと思う。

- 題目提示　（主題・トピック）（「これについていえば、いい」）
- 強調・とりたて　（焦点・フォーカス）（「(ほかのはよくないが）これはいい」）
- 対照・対比（「これは買うが、これは買わない」）
- 否定（「これは買わない。買わなくていい」）

題目提示は、あるものをとりあげて、それについて判断をくだす。逆にそれを強調して、これだけはいい、というようなこともいえる。対比の際や否定表現でハが用いられるというのも、文法書などにはよく記述されていることである。

「これはいい」という表現は、「買う」と「買わない」の両方の意味にとれる。それは、助詞ハの機能がいろいろあって、題目提示やとりたて、強調の場合は「買う」という意味にもなるだろうが、対照・対比、否定の場合は「買わない」という意味が生じるからである。

日本語学習者はこのようないろいろな機能を、ハ$_1$、ハ$_2$、ハ$_3$・・・というふうに分類して文法を習うのだろうが、他方、これらは機能的に通じるものがあって、対比の場合には対比されたものに焦点があるし、実際の発話状況では、対比するものを同時に述べないまま、対比の意味でハを用いることもあるだろうし、実際には助詞ハの意味分化をはっきり記述できないことも多いのではないかと思う。母語話者でさえ区別が難しい場合もあろう。実際には、発音されるイントネーションや共用される終助詞といった、他の共起する現象に解釈を頼っている部分もあるのが事実かもしれない。

「いいですね」と「ね」をつけると、意味がかわってくる。ここでは終助詞を扱わないが、これは「ね」という終助詞で発話のモダリティを相手と共有することになるので、買ってほしい人と同じ気持ちをあらわすことになって、「じゃ、買いましょう」ということになってしまうし、買ってほしくない人とは「買わなくていいですね」ということになる。あるいは、たとえば関西弁で、「これ、ええなあ」と言えば、相手に共鳴を求めて見解を共有し、買うと言う行為にいたるであろうが、「これ、ええわっ」と下がり調できっぱり言い切れば、買わないという自分の決断はすでにあって相手に自分の判断を伝える意図で発せられる。このようにして、「これはいい」という表現が含有している二義性を明らかにすることができる。

3.2. 助詞ガ

助詞ガの場合はどうだろうか。助詞ガは、格助詞と呼ばれるように、統語階層の最上位に位置する主格成分として必須項目に用いられるものだが、それが、典型的には情報構造において題目であり、意味役割としては動作主を表している[1]。

また、意味役割の上では動作主ばかりでなく、要求や願望の対象、知覚･能力の領域を表すこともあり、我々の例では述語に評価を表す形容詞をとって、評価の対象を表している。

ハとガを比べる場合は、この助詞の情報構造を作る機能が対比するものとして問われているのであっ

---

[1] 主格・動作主・主題の関係については仁科 2007 参照。

て、その場合のガは、題目を表すハに対して焦点を表すといってよい。いろいろと見て結局どれでもない、これが一番いい、という場合の「これがいい」についての説明になろう。取捨選択した結果、買うという行為に至る。
焦点でない場合、仁田 1989 の分類を借りれば、無題目の「ある時空に生起･存在する現象を写し取った現象描写文」[2]にあたり、それに対して有題目の判断判定文[3]としての「これはいい」と区別してもいいだろう。我々の例で、買う・買わないという解釈が問題になる場合は、焦点のガで買うことに決めることを表現し、否定評価のハで買わないことを表現することになる。

3.3.　助詞デ

意味カテゴリーとして格助詞を分類しようとする際、デは具格として、道具･手段を典型的な意味役割とされるだろうが、実際にはデという助詞そのものよりも、それに連結する名詞やそれを受ける述語動詞の意味によって、その意味役割がきまる。(表 1) [4]。統語カテゴリーとして分類すれば、必須項目を作らない斜格として、ほとんど中立的な意味をもつものとして性格づけることも可能である。
対照言語学的に見ても、必須項目を作らない周辺的な格ほど、言語間において表現が一対一で対応しないことが多い。たとえばドイツ語の副詞句を作る前置詞と比較したのが表 1 である。これを見ると、ほとんどの例でドイツ語は異なる前置詞（イタリック書体で表示）を使用していることがわかる。

表 1：　デ格の使用とドイツ語前置詞との比較

意味機能	**文例**	**対応するドイツ語** Sie schlugen einander…
場所 Raum	部屋で殴りあった	*in* dem Raum
場面 Szene	お見合いで殴りあった	*bei* dem Treffen der Heiratskandidaten
材料 Material	紙で作った	(Sie machten es) *aus* Papier
手段･道具 mittels, Instrument	ものさしで殴りあった	mit/*mittels* eines Metermaßes
原因･理由 Ursache. Grund	遺産相続で殴りあった	*wegen* Erbschaft
条件 Bedingung	待ったなしで殴りあった	*unter* der Bedingung, dass niemand stoppt, ohne Halt
様態 Zustand	裸で殴りあった	(*als*) nackt; im nackten Zustand
目的 Zweck	殺すつもりで殴りあった	*zwecks* Mordes,　mit der Absicht zu töten
動作主体 Agens	兄弟で殴りあった	*unter* Geschwistern, als Geschwister
時間 Zeit	5 分で殴り殺した	(Sie erschlagen einander) *in* 5 Minuten
単位 Einheit	二人で殴りあった	*zu* zweit

このように助詞の表す意味役割をリストアップしたのを見ても、「これでいい」という時の「で」がど

[2] 仁田 1989:19ff

[3] 仁田 1989:23ff

[4]仁田義雄(1995:21)にある四つの例を拡張したものである。

れにあたるのか、よくわからない。というより、「これでいい」と「で」を用いて言ったときに、どうして話し手の特定の気持ちを表すことになるのか、それがわからないことが問題になるのである。「これでいい」を敷衍すれば、「これをもっていいとする」「この選択でいい」「これで十分」というように、譲歩、妥協、あきらめ、満足といったニュアンスを暗示するが、そこまでこのようなリストに上ることはない。述語との組み合わせによって特定の意味の生まれる可能性などとあわせて、次章で扱う。

４．述語の意味と構文表現

4.1. 語の多義性と発話時の状況

形容詞「いい」は、ものの性質や状態を形容して用いるものであるが、この「いい」「わるい」も、絶対的なものでなく、むしろ話し手の評価があらわれるものである。古くて汚い手袋も、掃除のときには「いい手袋」になる。我々の例における「いい」はものの属性をあらわしているというよりも、話し手の評価を表すに他ならない。その評価する対象は発話時の状況を指して、まだ買っていない今の状況をよしとするといえる。たとえば何かを買うとき、これはいかがですか、といわれて、「いいです」と断るときは、買っていないこの状況をいいとする。それがすなわち、誘いを断ることになるので、「いいえ、いいです」と、「いいえ」をつけたりする。「けっこうです」と丁寧に言えば、本来の「いい」の意味から派生して、拒否する場合のほうに使われやすい。だから、「けっこうです、買います」とは言いにくい。拒否をする際にこそ、拒否しては相手に悪いと相手に対して配慮する気持ちが働き、丁寧語を選ぶ話者の心理があるのかもしれない。それゆえ実際のコミュニケーションで用いられる際は、「いいえ、けっこうです」と、「いいえ」をつけなくても、丁寧な拒否という語彙的な意味をもつようになっている。

いずれにせよ、ここでの「これはいい」という表現は、たとえば英語でも It‘s fine with me とか、ドイツ語で ist schon gut とかいうように、発話時の状況をいいと判断する意味で用いられているといってよいだろう。

4.2.組み合わせ･構文

発話時の状況をこれでいいとするという意味で、助詞デと組み合わせることもできる。「これはいい」「これでいい」という文をひとまとまりの構文として理解することもひとつの可能性である。何かを選択・決定する、という状況のときに、この構文が、伝達のコミュニケーションのうえでひとまとまりとして機能している。この形容詞「いい」が助詞デと組み合わさると前章で述べたように意味がかわるのは、異なる助詞の使用が、形容詞「いい」の多義性を誘発しているといってもよいだろう。

異なる格をとることで述語になるものの意味が変わる、という点で、「これにする」という表現と比較してみよう。買い物などで「これがいい」と選択・決定する場合に、よく用いられる表現に「これにする」 というのがある。「する」という動詞は、学習者が初期に学ぶ基本動詞のひとつで、ヲ格の直接目的語を取る動詞として既習している。ここでの「する」はその意味ではなくて、ニ格をとって、「それにきめる」とか、買い物のシーンでは「それを買う」という意味になる。格助詞ニにはいろいろな意味機能があるが、プロトタイプ的な意味としては、「動きの到達点」という意味があり、あれこれ迷う心の動きがある方向へ動いて、ひとつの点に到達する、というメタファーが働いていると考えられる。

日本語学習者に対する説明としては、「する」という動詞の語彙の意味が、格助詞によってきまること

を次のように記述できる。 辞書にもその項目を入れることが可能である。

「ニ格をとって、選択・決定をする意味。それにきめる」

それにたいして、「これでいい」という表現を説明するのに、助詞によって決まる形容詞の多義性というふうには説明できない。この表現は、いわばイディオム的にある一定の状況のときに用いられる個別のもので、それを一般化しようとすると無理がある。では、個別のままで覚えるしかなくて、文法として記述されるべきことはないのか、という疑問が残る。

５．省略

これは省略なのだと教えればいいのではないか、という考え方もあると思う。文法記述のひとつの可能性だといえよう。「これはいい」というのは本来「これは買わなくてもいい」というところを省略したものだ、というわけである。省略とは、そもそも、言わなくてもわかることを省くわけであるが、これも簡単ではなくて、統語論的に文法的制約を持った省略もあれば、語用論的にコミュニケーションの上で行われる省略もある。母語話者が意識しないでやっているような省略も、学習者にとっては学習事項になる。単にわかっていることを省くというのではなく、省略には省略のやり方があり、法則がある[5]。

「これは買わなくてもいい」と「これはいい」の関係について考えれば、日本語にはいわゆる話法の助動詞のようなものがなく、条件文の複文構造から、モダリティ表現が文法化されている。ある事態を条件接続形式などで提示し、それに対する評価を主文でする構造が基礎になっている。このほかにも、「買わなくちゃ」「買っちゃだめ」などのバリエーションや、「したほうがいい」と比較表現から文法化したもの、「せざるをえない」「しないわけにはいかない」「するしかない」などの類義表現もあるが、ここでは扱わない。いずれにせよ、条件文と主文の部分を肯定する(+)か否定する(-)かのコンビネーションで、四つのいわゆる deontic modality、義務・必要を判断するモダリティが表現される。

a. 買わなくては/買わなければ(-) いけない/ならない(-)
b. 買わなくても(-)　いい(+)
c. 買っては(+) いけない/ならない(-)
d. 買っても(+) いい(+)

この構文が完全に文法形式化していることが次のような制約でわかる。

「明日早く来なければいけませんか」

「いいえ、*早く来なければいけます・*早く来なければいいです」

ここでの正しい否定文は「早く来なくてもいいです」 となる。日本語教育文法ともよばれるが、「なければならない」「なくてもいい」というのがひとつの助動詞のように記述されるべきであることが首肯されよう。

これを省略すると、次のようになろう。

a. 買わなくては/買わなければ（いけない/ならない）
b. （買わなくても）いい
c. （買っては）いけない/ならない
d. （買っても）いい

---

[5] 省略の種類、契機については Hausperger 2003: 35f

しかしながら、こうやってみると、「いい」というのは、「買わなくてもいい」の省略でもあり、「買ってもいい」の省略でもあり得るということになる。「これはいい」と言ったときに、それがどちらの形に復元できるか、あるいはされるべきか、という明らかな文法上の理由がない。助詞ハの意味機能がいろいろあって、それによって、「これはいい」の意味が変わることをはじめに見たが、ちょうどそれと同じ現象だといっていいだろう。つまり、形式上説明しようとすると、どうどうめぐりになってしまう。

「これはいい」が、「買ってもいい」ではなくて、「買わなくてもいい」の省略であるとすれば、そしてそれが母語話者に正しく理解されるのであれば、そうでなければならない理由・状況があるはずである。その説明を以下に試みる。

c と d の「てもいい」とか「てはいけない」は、許可、または不許可・禁止を表すが、許可のシチュエーションと言うのは典型的に、その行為をする他者に対してされるものである[6]。妻の買い物で夫が財布をもっていて（あるいは逆で）、横から、「これはいいよ」などと言う場合には、「これはいい」が「これは買ってもいい」の省略した形と解釈できる。話し手が好ましいと思うこと、歓迎することを、あるいは、他者がやりたいと思うことを、他者に対して許可するという状況である。

それに対して、自分で買い物に行き、売り場でものを見て、買う、という必要に対峙している状況にある場合は、「買う」という命題の遂行が必要であるという前提がある。ゆえに a と b で表される義務・必要のシチュエーションである。その必要を評価判断する際、不必要であれば、買わなくていい、といって、買わずにおわる。その判断は話し手が行い、話し手が行為者であるにせよないにせよ、行為者に対する義務・必要を表す。我々の例では買い物をする話し手自身が行為者である。渡辺 1991 の表現を借りれば、c と d は「ひとごと」に属して、自分以外の他の人にたいする許可を表し、a と b は「わがごと」に属して、わが身にたいする必要を表すといってもいい。我々の例が、後者であることは明白なので、「これはいい」は、「買ってもいい」という許可ではなく、「買わなくてもいい」という不必要を表す表現の省略されたものであることがわかる。

表 2　モダリティの意味構造

a. ナケレバナラナイ	b. ナクテモイイ	義務・必要 / 不必要	話し手・当事者の行為（わがごと）
c. テハナラナイ	d. テモイイ	禁止 / 許可	他者の行為（ひとごと）

ここでは、表 2 のようにモダリティの意味構造を二分することによって、二分化された省略の含む意味を明らかにすることができた。このようにして、ある表現を省略であると認定した場合、省略時の状況、話者と他者との関係から、構造上のからくりを明確にすることによって、省略を適切に復元することができる。

[6] Bybee/Perkins/Pagliuca 1994: 177, 上記の c および d を speaker-oriented として、a および b を agent-oriented として区別した。

６．聞き手との関係・文化的背景

最後に「これでいい」という表現が全く異なった解釈をされ得るという例を二つ紹介する。以下、喫茶店主のことばの引用である。

> レストランでコーヒーを注文するときに「これでいいです」と注文するお客さんがいます。私は聞いていてもどかしい気持ちになります。「これでいいです」というのは「本当はもっと別のがいいけど、たいしたメニューがないからコーヒーで勘弁してやる」という意味です。注文される側としては、かなり気持ちがへこみます。お客さんが不満足であることが、はっきりと感じられるからです。なにか我慢をしながら希望をしているという息苦しさがあるので、サービスを提供する側も、堂々とサービスを提供できません。（以下省略）[7]

このように、憤っているわけであるが、これを民話「舌切り雀」の話と比べると、事情は全く異なる。舌切り雀をたずねていったおじいさんを雀たちは歓待し、帰るときにはお土産を差し出す。大きい葛篭と小さい葛篭と、どちらがいいか、という問いに、おじいさんは小さい葛篭をさして、「これでいい」と言う。ここで、おみやげを提供する雀が、上記の喫茶店主のように、これでいいとはなんだと言って怒るか、というと、もちろんそんなことはない。それどころか、小さいほうには金銀財宝が、大きいほうには毒虫やお化けがつめられていたのである。

同じ表現が、前者の例では否定的、後者では肯定的に解釈されている。舌切り雀のおじいさんは、自分は年寄りだし、そんな大きな土産をいただかなくてもいいと、へりくだり、遠慮する。ここには、自分をへりくだすことで、相対的に相手（ここでは相手の提供するお土産を通して）を高め、敬意を表す、という謙譲の原理がある。 日本語の待遇表現に見られるのと同じメカニズムがここで作用していることになる。こうしてこの表現は、敬語システムの中で説明される側面をも持つことになる。民話が象徴するような、謙遜が美徳であるという価値観をもつ文化背景を知ることも重要なことだ。

具格助詞デの表す、道具・手段・理由などの一次的な意味機能から、動詞や形容詞の組み合わせを経て、発話時の状況や聞き手との関係で、妥協・あきらめ・ひいては謙譲など、二次的な意味が発生するのだと考えていい。第 3 章でみたように、意味的に比較的中立であれば、いろいろな意味に展開しやすい。今まで見てきた例において、次のような意味的繋がりのプロセスを見ることができる。１は大根の選択、２は喫茶店、３は舌切り雀の例である。

表 3　意味展開のプロセス

1	道具　＞　手段　＞　条件　＞　悪条件　＞（受け入れ･理由付け）適切な条件＞　決定
2	道具　＞　手段　＞　条件　＞　悪条件　＞　妥協　＞　不満・無関心
3	道具　＞　手段　＞　条件　＞　悪条件　＞　自己同等化（へりくだり）＞　謙譲

それぞれに異なる意味へ展開するにせよ、この三つの例すべてにおいて、具体から抽象へ、状況描写表現から人間感情･人間関係表現へ、と意味的に広がっているという共通点があることがわかる。意味･用法が分化していく際に共通して働くメカニズムだといってもよい。そして、辞書や文法書には、このプロセスの最終的な到達点である、人間感情や人間関係を表す用法までには、記述がなされていないことがほとんどなのである。

---

[7] http://www.happylifestyle.com/article/194-15　（2011 年 5 月 10 日）

７．まとめ

以上、助詞の違いだけで話者の意味するところが全く違う例をもとに、いくつかの角度から分析を試みた。三つのそれぞれの助詞のもつ機能にもいろいろあること、買い物の状況で三つを並べた我々の例においては、以下の表の太字で示したように、理解されることを確認した。

表 4　選択状況における助詞の意味機能と解釈

助詞	意味機能	解釈
ハ	有題目　判断判定文	これはいい
	否定的評価　必要･義務	**これは買わなくていい**
ガ	無題目　現象描写文	これがいい
	焦点	**これが一番いい**
デ	妥協、不満・無関心	これでいい
	条件の受け入れ・満足	**これでいい、十分**
	謙遜	これでいい、十分
	etc.	

その際、ハとガで反対の意味になる場合は情報構造論的な対立になることに言及した。
さらに、モダリティ表現が、発話時の状況と話者の位置によって二分されることを示し（表 2)、それによって省略の意味が確定することを明らかにした。
さらに、斜格をつくる助詞の意味自体はむしろ中立的で、二次的な意味の発生をみること（表 3)、そのプロセスは人間感情･人間関係の表現へ広がるもので、言語文化を象徴するものでもあることを考察した。

参考文献

三枝 令子- 中西 久実子(2003)日本語文法演習 話し手の気持ちを表す表現―モダリティ・終助詞―スリーエーネットワーク
仁科陽江（2008)「初級文法の記述を考える-主語・主体・主格・主題- 」『日本語教育連絡会議論文集』Vol.20 pp.12-18
仁田義雄（1989)「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』くろしお出版 pp.1-56
仁田義雄(1995)「格のゆらぎ」『言語』24:11 大修館書店 pp.20-27
森山卓郎(1997)「日本語における事態選択形式―「義務」「必要」「許可」などのムード形式の意味構造―」『国語学』 188 集　国語学会 pp.12-25
渡辺実 1991「「わがこと・ひとごと」の観点と文法論」『国語学』165 pp.1-14
Bybee, Joan & Perkins, Revere & Pagliuca, William (1994) *The evolution of grammar: tense, aspect, and modality in the languages of the world*. Chicago: Univ. of Chicago Press
Keenan, E. & Comrie, B. (1977). Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar. *Linguistic Inquiry*, 8:63-99.

Hausperger, Birgit (2003) *Sprachökonomie in Grammatik und Pragmatik: Die Ellipse*. München: Herbert Utz Verlag.

Hengeveld, K. (2004) Mood and modality. In: Booij, G. & Lehmann, C. & Mugdan, J. (eds.) *Morphology: A Handbook on Inflection and Word-Formation*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter, 1190-1202

Nishina, Yoko (2012) Grammatikographie der Pragmatik – zur Erklärung der pragmatischen Faktoren bei der Verwendung von Konstruktionen im Japanischen. In: Kotorova, E.G. & Kotin, M.L. (eds.) *Die Sprache in Aktion: Pragmatik – Sprechakte – Diskurs.* Heidelberg: Winter, 000-000

Szabó, Zoltán Gendler: Adjectives in context, in: Kenesei, I & Harnish, R. (eds.) *Perspectives on Semantics, Pragmatics, and Discourse. A festschrift for Ferenc Kiefer*. Amsterdam/Philadelphia 2001, S. 119-146